

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈11月15日（金）放送分〉

テーマ「奄美群島12市町村の伝説・昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第3金曜日にお届けしている、奄美の伝説や昔話などを紹介する「奄美群島12市町村」シリーズの第8回目、知名町の昔話「魚の珠」です。

昔、ハッサンという父親がいました。心の良い人でしたが貧乏で、毎日毎日縄を作って、それを売ったお^ほ金で妻や子どもを養っていました。また、セージとセードという二人の旅する若者がいて、セージは二十歳、セードは十九歳でした。

ある日、セージとセードの二人は縄を売^ぎり歩くハッサンに出会^あいました。「お父さん、お父さん、その縄はいくらで売りますか。」とセージが訊くと、「一本が三^{せん}銭です。天気の良い日は七本作って二十一銭儲けますが、悪い日は三本から五本しか作れません。」とハッサンは言いました。「それは気の毒だ。ここにお金^おが百円あるから、お父さんにあげましょう。このお金で楽に暮ら^くしなさい。」と、セージはハッサンに百円を与^まえました。ハッサンは驚いて、「一体、あなた方はどこの国の人ですか。」と訊くと、「また廻^{まわ}ってくるから、国を尋ねることはありません。お金を持って帰^{かえ}りなさい。」と言われました。ハッサンは厚くお礼を言^おって、お金^おを貰^{もら}って帰^{かえ}りました。ハッサンは帰^{かえ}りながら、自分は今まで栄^{えい}養のあるものを食^くったことがないが、今日は一斤十銭の牛の肉を一斤買^かって帰^{かえ}ろう。そして白^{しろ}い布五尺^{しやく}を十銭で買^かって、村でそれを売^うれば二十銭になる。そうすれば十銭の儲けになるから、百円の金^{きん}は減^へらないと考えました。ハッサンは牛の肉と白^{しろ}い布を買^かい、お金^おは入^いれるところが無^なかったので帽子の裏に納^なめて帰^{かえ}って行^いきました。すると鳶^{とび}が飛^とんできて、持^もっていた牛の肉を食^くおうとしました。ハッサンが鳶^{とび}を追^おい払^{はら}うと、鳶^{とび}はお金^おが入^いった帽子をくわ^くえて飛^とび去^さってしまいました。「その帽子は置^おいてつ^つてくれー、牛の肉はやるからー。」とハッサンは言^いいましたが、鳶^{とび}はどこかへ飛^とんで行^いってしまいました。ハッサンは家^いに帰^{かえ}り、妻^{つま}に向^{むか}かって、「言^いってみても悲^{かな}しくなるばかりだけど、実はこんなことがあ^あった…」と語^{かた}って、牛の肉は子どもたち^{こどもたち}に与^{あた}え、自分はまた、せっせと縄を作るのでした。

一年ほどが経^へち、ちょうどその日はお盆^{おぼん}でした。ハッサンは、またセージとセードの二人に逢^あいました。セージが、「どうしたお父さん、あれほどのお金^おをあ^あげたのに、どうやって使^{つか}い果^はたしたんだい。以前の帽子さ^{かぶ}え被^かれずに、そんな破^{やぶ}れ帽子^{かぶ}を被^かるような貧乏^{へいふ}にな^なって…」と言うと、ハッサンは、「そう言^いわれるのも当^{あた}り前^{まへ}です。実は、あ^あのときのお金^おはこれこれ^{これこれ}で…」と語^{かた}りました。セージは、「僕^{ぼく}の力^{ちから}ではどうしても困^こっている人を助^{たす}けることができない。今^{いま}度はセード、君^{きみ}が何^{なん}とかしてくれ。」と言^いいました。セードは財布^{さいふ}から小指^{こさき}ぐらいの大き^おさの鉛^{なまり}を取り出^だして、ハッサンに与^{あた}えました。ハッサンは、「あ^ありがとうござい^ます。」とお礼^{れい}を言^いいましたが、心^{こころ}の中^{うち}では、こんなものをどうし^{どう}しよう…と思^{おも}いながら、鉛^{なまり}をたばこ入^いれの中^{うち}に納^なめ、二人と別^{わか}れて家^いに帰^{かえ}りました。

その日のことでした。ハッサンの家^いの隣^{とな}に住^すむ、魚取^{おやじ}りの親^{おやじ}父^{ちち}が、投^なげ網^{あみりょう}漁^{りょう}に出^でかけようとしたところ、網^{あみ}のオモリ^{おも}が取^とれていま^{いま}した。魚取^{おやじ}りの親^{おやじ}父^{ちち}は村^{むら}中^{じゆう}を歩^あいて、オモリ^{おも}に使^{つか}う鉛^{なまり}はないかと尋^{たず}ねて回^{まわ}りましたが、どこにもな^なか^なったので、ハッサン^{だんな}の家^いにや^やつてきて、「隣^{とな}のお父^{おやじ}さん、鉛^{なまり}があ^あった^{だんな}ら譲^{ゆづ}ってくれないか。」と言^いいました。ハッサンは、「ち^ちょうどここ^{ここ}に、立^た派^はな旦^{だんな}様^{さま}にもら^{もら}った鉛^{なまり}があるけど、これ^{これ}をあなた^{あなた}にあ^あげま^ましょう。」と言^いうと魚取^{おやじ}りの親^{おやじ}父^{ちち}は、「い^いや、ただで貰^{もら}っては済^{すま}ないから、金^{きん}を払^{はら}うので鉛^{なまり}を分^わけてくれ。」と言^いいましたが、「い^いや、心^{こころ}配^{はい}はい^いらないので持^もってい^いってくだ^{くだ}さい。」とハッサン^{だんな}は言^いいました。魚取^{おやじ}りの親^{おやじ}父^{ちち}は鉛^{なまり}を持^もって帰^{かえ}りましたが、今^{いま}度はその妻^{つま}がや^やつてきて、「う^うちの父^{ちち}ちゃん^{ちち}があなた^{あなた}に鉛^{なまり}を貰^{もら}ったそう^{そう}ですが、網^{あみ}のオモリ^{おも}がで^できて漁^{りょう}に行^いったら、最^{さい}初^{しう}の一^{いつ}投^{とう}目^めで獲^とれた魚^{うめ}を、あなた^{あなた}に差^さし上^あげること^{こと}にしま^{しま}しょう。」と言^いいま

た。魚取りの親父は正直な男で、夜になってから、漁で最初に獲った大きな魚をハッサンのところに持ってきました。親父は、「これは、うちの妻が約束したものです。」と言うので、ハッサンはありがとうと言って魚を貰いました。そしてその魚を料理しようとしたところ、魚の中から、六角形のビードロ玉が出てきたので、その玉を自分の子どもにおもちゃとして与えました。

その夜中、ハッサンの子どもがあまりに泣くので、そんなに泣くと隣の人に叱られるよ、と言って慰めましたが、どうしても泣き止まないの、子どもを起こしてみると、子どもはビードロ玉を握りしめていました。そしてその玉を見ると、とても良く光っていました。ハッサンは喜んで、「こんなに良いものを授かった。」と言いました。

翌朝、ハッサンの家の前^{まえどなり}隣に住む、宝^{ほう}石^{せき}造りの妻がやってきて、「子どもに充分なご飯を食べさせなさいよ。夜にあんなに泣かれると、こっちが寝不足になって困るでしょ。仕事がないあんたたちはいいけど、自分たちは仕事で忙しいのよ。」と言いました。「そう言われるのも、ごもつともです。実はこれこれのわけで…」とハッサンが理由を話すと、「その玉をちょっと見せてくれ。」と女は言いました。ハッサンが玉を見せると、「これを百円で売ってよ。」と言いました。ハッサンが、「値段によっては、売らないこともない。」と言うと、「では、家に帰って相談してくるから、これは誰にも売らないで。」と言いました。しばらくして今度はその長男がやってきて、「三百円で売ってくれないか。」と言うと、ハッサンは、「自分はこの玉の値段を知っている。その値段では売れない…」と答えます。「では、五百円で売ってくれ。」と言うと、「五百円でも売れない…」と答えます。それを見ていたハッサンの妻は気が気ではないので、早く玉を売ってしまいなさいと、うしろから合図をします。「いくらで売るのがか。」「千円で売ろう。」「自分は八百円は持っている。八百円で売ってくれ。」「いや、千円以下で売ることはいけません。」「それでは四、五時間待ってください。どこかで二百円借りてくるから。」やがて長男が千円のお金を持ってきたので、ハッサンはその玉を売りました。そしてそのお金で立派な暮らしをすることができました。

次の年の八月、またセージとセードが村にやってきました。二人は噂^{うわさ}を聞いて、ハッサンを訪ねてきました。「お父さん、今度は良かったね。」とハッサンに鉛をあげたセードが言うと、セージが、「セードに助けられたね。」と言いました。ハッサンは二人にお礼を述べて、「これから親類を集めてお祝いをして、御恩返しをしたいと思います。」と言って、二人を厚くもてなしました。

さて、みなさんは「宝石」についてどんなイメージを持っていますか。さきほどのお話のように、食べようとした魚の中から、きれいな玉が出てきたら、かなりびっくりするでしょうね。さらに、それがとても価値の高いものだったら…。当時の千円は、現在の数千万円ですから、う～ん、思わずため息が出そうな素敵な展開です。

主人公のハッサンは心の良い人だったので、最終的にはお金持ちになりましたが、後半でどんどん宝石の値段をつり上げていく場面が、何だかとても面白いですね。でも、よく考えるとかなり欲深いような気もしますが、気のせいでしょうか…。普段はあまり欲を出さないけど、ここぞ！という場面では貪^{どんよく}欲に、というキャラクターがなかなか魅力的です。

さて、このように奄美図書館には、面白いお話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。